[調査] フォルボネの保護主義(1)

——その形成と初期の未発表手稿『農業と商業と財政にかんする試論』の検討——

フォルボネはフランスの18世紀後半のまさに半世紀を主に経済の時論家して活躍し，常に世評の高い多作な著述家であった。彼がなによりも英仏経済の対抗を強く意識し，自由と保護の政策を独自に結合して，フランスの優位を獲得しようとした著書『商業要論』*Elémens du commerce*, A. Leyde, et se trouve à Paris, chez Briasson, …1754, 2vol. 400; 276 p. は圧倒的な好評を博して，一時期，フランスの経済学を代表する感があった。時論的要素の多いこの著作はカンティロンの『商業一般の本性にかんする試論』(1755年)やケネーの『経済表』(1758年)の出現以後はさすがに理論的に見劣りのするものとなったが，フランスの経済のリアルな観察と展望という点では，ケネーに対抗しうるほとんど唯一のものであった。しかし今日では，盛んなケネー研究の陰にかくされて，フォルボネはそれにふさわしく十分に研究されているとはいえない。いまは信頼できる書誌ひとつ見出せない状況である[1]。彼が多くの論争を背景に持つ時論家であり，だからこそまた多作家であったことがフォルボネの本格的な研究を困難にしている面は確かにあるが，それよりも，たとえばシュムペーターの評言に代表的にみられるような「なんの独創力もない折衷主義者」[2]という見方や19世紀以来の，いわゆる「自由放任」を金科玉条とする思潮のなかで，しばしば「最後の重商主義者」といわれる漠然とした旧弊なイメージがフォルボネを分析的に研究することを妨げてきたことは確かであろう[3]。

フォルボネが「折衷主義者」であったことはまちがいない。しかしフォルボネの経済学の「折衷」と模索のなかに，むしろこの時代のフランス経済学のさまざまな特徴や想源を見出し，重商主義から重農主義への転換期の「新重商主義者」と呼ばれる一群の経済学者たち(主としてグルネのグループ)[4]の種々の問題点を見出すことができるのである。その意味では，フォルボネはまことに典型的で興味深く，かつ重要とさえ思える経済学者であろう。

フォルボネは時代とともに思想的発展を遂げ，刻々とその相貌を変るというタイプの思想家ではない。時局に対する発言が多く，対象とする問題が多様であるから，そのようにみえるが，彼の理論と政策の基本は主著『商業要論』で確立すると，それ以後は彼が最大の論敵ケネ

1) フォルボネの死の直後から，『讃辞』も含めて，いくつかの伝記的研究があるが，そのほとんどはごく近い関係者によるもので，貴重な資料や情報を含むと同時に客観的な正確さに欠ける憾みがある。[Le Prince d'Ardenay (J.-S.-H.-M.)] *Eloge historique de François Véron de Forbonnais,*……lu à la Société libre des arts du Mans, dans sa séance du 29 brumaire an IX. Le Mans, an IX. 16 p.; De l'Isle de Sales (J.) *Vie littéraire de Forbonnais*. Paris, 1801 (an IX), 87 p.; Hauréau (B.) Véron de Forbonnais, in *Histoire littéraire du Maine*. Nouv. éd. Tom. X. 1877, pp. 150–203; Véron Duverger, *Etude sur Forbonnais*. Paris, 1900, xix, 238 p.; Fleury (G.) *François Véron de Forbonnais, sa famille, sa vie, ses actes, ses œuvres. 1722–1800*. Mamers et Le Mans, 1915, 586 p. 書誌としては，不正確だが，Desportes (N.) Véron de Forbonnais (François), in *Bibliographie du Maine et diocèse du Mans*. Le Mans, 1844. pp. 501–504.

2) Schumpeter (J. A.) *History of economic analysis*. New York, 1954, p. 174 (東畑精一訳『経済分析の歴史』1955年，第1巻，362ページ)。

3) 外国では研究論文は2点ある。Torlonia (C.) *Le dottorine finanziarie di F. V. Duverger de Forbonnais nell'opera "Recherches et considérations sur les finances de France."* Roma, 1908, 114 p.; Morrisson (C.) *La place de Forbonnais dans la pensée économique*, in *Questions financières aux XVIIIe et XIXe siècles*, par C. Morrisson et R. Goffin. Paris, 1967, pp. 1–83. わが国では，むしろ「最後の重商主義者」の面に光をあてた研究が2つある。菱山泉「フォルボネとケネー」『経済論叢』，第72巻第1号，これは『重農学説と「経済表」の研究』東京，昭和37年，第3章第4節，に収録された。吉田静一「フォルボネの重商主義」小林昇編『講座経済学史 I 経済学の黎明』東京，昭和52年，第1部第3章，第3節の2，最近の研究では，米田昇平「『商業要論』におけるフォルボネの保護主義」『経済学研究年報』(早稲田大学大学院経済学研究科)，第21号(昭和57年3月)がある。

4) 津田「ブリュマール・ドゥ・ダンジュル『商業とその他の国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』(1754年)」『東京経大学会誌』第137号(昭和59年9月)を参照。

ーに対したときでさえ，基本的には変っていない。だからこそ彼はケネーの体系を前にして敗退せざるをえなかったのであるが，逆に『商業要論』にいたる思想の形成過程では，きわめて短期間のうちにさまざまな理論や政策をうけ入れて独自の保護主義の世界を生みだしている。ではその保護主義は，どのようにケネーの体系に対抗しえただろうか。ケネーの出現以後も彼の主著は久しく民衆の関心をとらえていたが，しかし彼がおそまきながら直接ケネーを批判の対象とした『経済学の原理と考察』*Principes et observations œconomiques*. A Amsterdam, chez Marc Michel Rey, 1767, 2 tomes en 1vol, x, 316; [iv], 284 p. は明らかにケネー批判には成功していない。ケネーはフォルボネの批判の前に微動だにしなかったのである。彼はなぜおくれてケネー批判に立ち上ったのだろうか。彼は渾身の力をつくして，なぜケネー批判に成功をおさめなかったであろうか。またケネー批判を成就しなかったことの延長線上にあることであろうが，『商業要論』で力強く登場した保護主義者フォルボネはなぜ1786年の英仏自由通商条約(イーデン条約)を批判しなかったであろうか。彼は生涯ついに一度もイーデン条約を批判しなかったのである。

フォルボネの文筆活動は，彼がイーデン条約に対して沈黙を守った時にすでに実質的には終っている。一方，あとでみられるように，彼が『商業要論』にいたる保護主義の端緒をつかんだのは1713年の英仏自由通商条約(ユトレヒト条約)に反対するウィッグの機関誌『ブリティッシュ・マーチャント』の翻訳であったのであるから，象徴的にいえば，フォルボネの経済論の展開は2つの英仏自由通商条約の間の，生産力において勝るイギリスの主導のもとで絶えざる対応を迫られるフランスの経済の発展と混乱の激動の時期にあったといえよう。この間にあって，フォルボネの保護主義の形成と，その構造，ケネーへの対抗と，その挫折，その経過はどうであっただろうか。これが以後に続く私のフォルボネ研究の一連のテーマである。今回は『商業要論』の成立までの事情を，フォルボネの知られている諸著作と未発表資料とによって追い，次回に『商業要論』そのものの分析を試みたいと思う。

フランソワ・ヴェロン・デュヴェルジェ，シュール・ドゥ・フォルボネ(François Véron Duverger, sieur de Forbonnais)は1722年10月3日，ル・マンに生まれた[5]。父は当時この都市で盛んであったエタミンと呼ばれるごく薄手の毛織物の，祖父の代からの製造業者であった。ル・マンはエタミンの，ランスにつぐ第2の生産地であった。その活況の場景は画家ブーシェによって描かれているという。父は1737年にル・マンの北，約40キロのマメール近傍のフォルボネの領地を購入して貴族となっている(われわれの著述家の名はここに由来している)から，かなり裕福であったにちがいないが，1745年ごろには事業に失敗して織物業を離れ，以後はル・マンの商事裁判官や市法官を務めている。父はまた，ル・マンに絹織業を興そうとして，自ら桑を栽培し他にもこれを奨励している。この計画は成功しなかったが，彼は実業を離れたあとも，地域の熱心な産業の指導者であった。

フォルボネは4才で母を亡くし，11才から5年間，パリで学び，このあと家業を継ぐ予定でル・マンにもどり，19才のとき商用でスペインとイタリアを旅行し，2年後の1742年21才のとき帰郷した。しかし彼は「15ないし18ヵ月」とどまっただけで，1744年ごろ彼は再び家を出た。父の再婚を嫌ってのことであるらしい。独立して営業するようにとの話もあったが，すでに傾きかけた父の事業を妨げないために，船主で奴隷貿易業者であったナントの叔父を頼り，そこで1747年25才で「成年」に達するまで叔父の仕事を手伝った。当時ナントはアメリカ交易の中心であり，リヴァプールに対抗する奴隷貿易の根拠地であった。好んで就いた仕事ではなかったが，この間に彼は貿易と海運の実務と，植民地と本国との関係の実際を大いに学んだ。あとで述べるフォルボネの最も早い時期の未発表手稿『農業と商業と財政にかんする試論』に桑の栽培や奴隷貿易や植民地にかんする詳しい記述がみられるのは，このころの彼の生活の投影である。

しかし彼の野心はパリに出て公職に就くことであった。彼は1747年あるいは1748年に成年に達するとともにパリに出た。当時出版されたばかりの『法の精神』が彼の関心を強くとらえた。彼はナントで知った経済の理論的研究を深めながら，まず『法の精神』の抜粋と考察をまとめた。これは後に『"法の精神" の章ごとの抜粋，および数ヵ所の注解とこれまでのすべての批判に対する見解』という題名で出版される[6]。彼はここで『法の精神』

5)　以下，伝記的な記述は1)であげた諸資料にもとづいている。いちいちの典拠は省略する。

6)　この著作については書誌情報が非常に混乱している。私の知る限り2種類ある。[Forbonnais] *Extrait du livre de l'Esprit des loix, chapitre par chapitre, avec des remarques sur quelques endroits particuliers de ce livre, et une idée de toutes les critiques qui en ont été faites*. A Amsterdam, chez Arkstée et Merkus, 1753, [vi], 431, [i] p. と *Opuscules de M. F***. Tome III, contenant Un*

に「計算の精神」を対置し，モンテスキューの政治体系に従属する経済論を独立の経済論へと転換することを求めた。モンテスキューの経済論はその多くを友人であったムロンに負うていたのであるから，フォルボネがモンテスキューの経済論を批判的に研究することは，とうぜん彼をムロンの経済学(Melon, J.-F. *Essai politique sur le commerce,* 1734)研究へと向わせたはずである。ムロンの経済論はローの失敗以後の混乱とコルベール主義の行きすぎを調整する役割を担って，そのためにイギリスの経済学(たとえばペティの政治算術，名をあげずにではあるが明らかにチャイルド，あるいはジョシュア・ジーも)をとり入れ，かつフランスの経済学(ヴォバン，名をあげずにボワギルベール)を継承して，重商主義から重農主義へ，流通から生産へ，統制から自由へと，混乱を伴いつつ僅かながら一歩を踏みだし，表面的ながらはじめて経済の全分野をカヴァーするものであった。フォルボネの経済学には早くからムロンと，そこに流れこんでいるさまざまな経済学の影響が認められるのである。

同じころ彼は就職のために経済論文を書き，これを時の大蔵大臣マショ・ダルヌヴィルに送ったといわれている。フォルボネがグルネの面識を得るにいたる事情は，その事実さえ，どの伝記的研究も明らかにしていないが，おそらくそれはグルネの上司でありパトロンでもあったマショが論文の送付を受けて，これをグルネに照会したということであろう。そうだとすれば，それはグルネが通商監督官に就任する1751年4月の前後である。

フォルボネはグルネの指導のもとで，まず2つの翻訳を出版する。1つはスペインの重商主義者ウスタリスの『商業と海運の理論と実践』であり，他の1つはチャールズ・キング編『ブリティッシュ・マーチャント』である。前者は1753年3月に，後者は1753年7月に，それぞれつぎの題名をもって出版された。*Théorie et pratique du commerce et de la marine. Traduction libre sur l'Espagnol de Don Geronimo de Uztáriz, sur la seconde édition de ce livre à Madrid en 1742.* Paris, chez la veuve Estienne et fils, 1753, xi, 206 p.; *Le Négotiant anglois, ou Traduction libre du livre intitulé: The British Merchant, contenant divers mémoires sur le commerce de l'Angleterre avec la France, le Portugal et l'Espagne. Publié pour la première fois en 1713.* Imprimé à Dresde, et se trouve à Paris, chez les frères Estienne, 1753, 2 vol., cxcii, 268; 447 p. である。

フォルボネはウスタリスの訳書[7]に序文と訳注をつけ，断片的ながら彼の最初の経済論を示している。彼は「製造業と海運の再建と財政の改革」(viii)を説くウスタリスの啓蒙的役割を評価しながらも，ウスタリスの経済の改革的展望を決定的に危うくするものは，彼が農業を軽視し，農業と商業と製造業と財政を結合する観点を欠いていることであるとみて，この点に批判を集中している。彼によれば，「農業と商業と財政という，3つの原動力こそが国家を動かす」(viii)のであるから，ウスタリスが目ざす改革，つまり「製造業と海運の再建と財政の改革」は本来「それ自体が，いっさいの商業と製造業の根本である優れた土地の耕作を前提とす」(viii)べきことである。ここでは農業に対する強調が顕著である。ウスタリスの訳書の序文にはもう1つの重要な主張がみられる。それはやがて『商業要論』において「政治的商業」という概念で端的に示されるようになるものであるが，フォルボネはフランスがイギリス「より産業的ではなかったにもかかわらず」(v)，コルベールによって「奨励され援助されたわが国の商業がこの時代の驚歎すべき人々によって発展を遂げ」(vi)，列強に伍してアメリカでの植民地分割に参加した次第を述べ，「まさにこの時において，商業の大原理が政治的研究の対象となった」(vi)と述べ，その「商業による現物的富と相対的富の組合せが諸国民の力を決定した」(vi)のであると指摘していることである。『商業要論』での定義によれば，「現物的富」とは農産物と加工商品の富であり，「相対的富」とは外国貿易によって獲得される貨幣を意味する。彼はこれらの二種類の富の組合せを「政治的富」と呼ぶのである。

ウスタリスの翻訳は必ずしも彼を満足させなかった。彼は同時に進めていた『ブリティッシュ・マーチャント』の翻訳とこれに関連するイギリス経済の研究成果にもとづいて，ウスタリス批判の意図をこめて，ただちに『スペイン財政論』(*Considérations sur les finances d'Espagne.* Dresde, 1753, 173 p.)を書き，これを1753年11月に出版した[8]。彼はここでは，スペインが「財政を政

---

extrait chapitre par chapitre du livre de l'Esprit des loix, des observations sur quelques endroits particuliers de ce livre, et une idée de toutes les critiques qui en ont été faites, avec quelques remarques de l'éditeur. A Amsterdam, chez Arkstée et Merkus, 1753,[vi], 431, [i] p. である。Fréron が Forbonnais の著作を自著のなかに含めたのが後書であるが，内容は同じである。しばしばこの著作が1753年以前に出版されたとされるが，私は確認していない。

7) *Le Journal des sçavans* (avril 1753) にこの訳書の新刊紹介がある。pp. 196–201.

治体の生命の原理」とみなし，すべてを財政に従属させたために，農業と製造業と商業は潰滅的打撃を受け，そのことがまたスペイン財政の破局を早めたことを指摘し，財政の動きを決めるのは「国民の勤労」であり，「労働による人民の富裕，これこそ国家の全員がそれによって堅実に活動しうる唯一の軸である」(xx)と述べている。フォルボネはこれらウスタリスにかかわる2つの著作をとおして，スペインの重商主義者とは別の，広範な「国民の勤労」に根ざす「政治的商業」と，それによる人民の全般的富裕の道の実現を模索していたのである。

もう一方の『ブリティッシュ・マーチャント』の翻訳[9]はフォルボネの経済思想の形成をいっそう早めている。『ブリティッシュ・マーチャント』は1713年のユトレヒト英仏自由通商条約に反対するイギリスの毛織物業者や絹織物業者を中心にしたウィッグの機関誌であった。彼らはこれに拠って，対フランス保護貿易の論陣を張り，世論をまきこんでトーリー政府を敗退させ，以後，対フランス保護貿易を政策として定着させることに成功した。グルネとフォルボネは現下の英仏の経済状況の発端をここに見ていた。

フォルボネは2巻となった訳書の第1巻の1/3ほど(158ページ)を費やして長大な序文をつけ，冗長を避けるためにテクストを抜粋し，その多くの箇所に詳細な訳注を施した。これらの仕事は彼がこの仕事に注いだ膨大なエネルギーを思わせるが，実は彼はこの仕事を二度にわたって行なっているのである。幸いにもフランス上院議会図書館で見出したフォルボネの訳稿[10]によってそのことがわかる。手稿と刊本とでは，本文に多少の変更があるほかに，序文と訳注と巻末の部分に大きな違いがある。手稿と刊本のどちらも，序文が訳者序と「グレート・ブリテンの商業とその諸結果の総論」と「1698年のダヴナント氏の商業と財政における政治算術の使用について」の3つの部分からなることは同じだが，手稿では，ページ建てでいえば，大判ではあるが僅かに6ページの，単に「序文」(préface)と題するものが，刊本では「訳者の予備的論説」という30ページにふくれあがっており，内容的には手稿の「序文」が形式的な序文であるのに刊本では分量的には約4倍の英仏貿易史の概説といったものになっている。また「グレート・ブリテンの商業…の総論」については，刊本は手稿の約3.5倍に書き増しされている。訳注も大いに増やされている。一方，手稿には巻末に「『ブリティッシュ・マーチャント』の総括と英仏の商業にかんする若干の考察」(Idée générale du British Merchant, avec quelques observations sur le commerce de la France et de l'Angleterre)と題する大判で22ページ分のフォルボネによる問題点の整理と結論がつけられているが，これは刊本にはない。手稿は明らかに，ある意図をもって再編成されたのである。そして構成しなおされた刊本は，あとで述べる理由によってはるかに『商業要論』に近づけられているのである。

グルネはチャイルドの『新交易論』(*A new discourse of trade*, 1693)につけた『注解』で，イギリスがフランスを経済的に圧倒したのは1660年から1700年にかけて，議会がつぎつぎと打出した国内通商の自由と外国貿易の奨励にかんする諸法律によってであり，フランスはまだ，その1660年の段階にさえ達していないと嘆いたが[11]，フォルボネはグルネの意にそって，「訳者の予備的論説」

8) *Ibid.*(décembre 1753)に新刊紹介がある。pp. 802–806. この著作は以後，つぎのような諸版でつぎつぎと増補されながら出版される。*Considérations sur les finances d'Espagne*, 2e éd., *augmentée de Réflexions sur la nécessité de comprendre l'étude du commerce et des finances dans celle de la politique*, Impr. à Dresde et Paris, les frères Estienne, 1755, 2 p. l., 217 (*i. e.* 197) p. 1 l., 79 p. この増補された論文は重要である。*Mémoires et considérations sur le commerce et les finances d'Espagne, avec des Réflexions sur la nécessité de comprendre l'étude du commerce et des finances dans celle de la politique*. A Amsterdam, chez François Changuion, 1761, 2 vol. xxxi, [i], 464; 263, [i], 266 p. 第1巻と第2巻の前半にそれぞれ11章からなる Mémoires sur le cmmerce des Espagnols が増補されている。しかしこれらの Mémoires はフォルボネのものではない。1764年版もある。また1755年の第2版は E. Mauvillon の *Discours politiques*. Tome second. Amsterdam, 1756. chez J. Schreuder et Pierre Mortier le Jeune に収録され，さらに再刷版(Amsterdam, chez J. Schreuder, 1769)でも出版されている。

9) *Le Journal des sçavans*(octobre 1753)に新刊紹介がある。pp. 689–695.

10) Le Négotiant anglois ou Traduction libre du livre intitulé The British Merchant contenant divers mémoires sur le commerce de l'Angleterre en général, et en particulier avec la France, le Portugal et l'Espagne. Avec la traduction d'un Discours de Mr. Davenant sur l'usage de l'Arithmétique politique dans le commerce et les finances. [3], 395, [11] feuillets, 368×230 mm. Bibliothèque du Sénat 158(ancien 9017).

11) Tsuda(T.)éd. *Traités sur le commerce de Josiah Child avec les Remarques inédites de Vincent de Gournay*. Texte intégral d'après les manuscrits conservés à la Bibliothèque municipale de Saint-Brieuc. Tokyo, Kinokuniya, 1983(Economic Research Series No. 20.The Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, pp. 106–123 et 398).

ではまさに1660年から『ブリティッシュ・マーチャント』を出現させた1713年のユトレヒト条約までの英仏の貿易史を通覧している。彼は英仏の資本，海運力，利子率，関税率，羊毛・亜麻・絹織物製造業等を比較し，イギリスの製造業に比べて「われわれの技術はそれほど早く幼稚段階を脱しえなかった」(vi)ことをあげ，「商業の利益は，それが有効で変らぬ保護を政治的利益から受けなければ，やがて政治的利益から分離する」(iv)と指摘した。この意味で彼は『ブリティッシュ・マーチャント』の「帰結は必ずしも正しくひきだされてはいないが」(xxvi)，そこには「きわめて教訓的」(xxvi–xxvii)で「最も真正な格律が集められている」(xxxi)とみている。そして彼は「政治的商業の学問」が示す展望を，つぎのように描いている。「国民の商業知識がしだいに広まるにつれて，産業活動は活発になり，また自己の製品に注意深くなり，仕事に従事する人間がいっそう多くなるので，富裕はいっそう全般的となり，土地はいっそう大きな価値を持ち，農業はいっそう大きな交易に材料を提供する。…」(xxix)

手稿から刊本への構成の変化と，そこに認められるフォルボネの意図は「グレート・ブリテンの商業の総括」において最も明瞭である。彼はまず手稿では，イギリス経済のさまざまな局面をとり上げて，スコットランドとアイルランドを従属下におくイングランドの，そしてロンドンの独占状態，国家と結びついたギルド組織，活発な国内流通と競争，特権諸会社の活動，イングランド銀行の役割，保険会社の機能，各植民地の物産の状況，航海条令，消費税中心の税制，ワークハウスの効用，信用の限界，そして公債の現状を概観している。これはまさに『ブリティッシュ・マーチャント』の個々の論文を読むにあたって，読者が知っておくべきイギリス経済にかんする予備知識である。しかしそのあと，フォルボネは低金利の有利と，貨幣の継続的増大による産業活動全体への刺激，そしてこれらの目的を唯一果しうる外国貿易の重要性という，彼が「特に詳しく述べた」(cxxv)という議論を手稿に書き加えて，これを刊本のテクストとしている。これらはイギリス経済の概観という本来の序文の趣旨とは異質の，いわばフォルボネの理論に属するものであるが，彼はあえて，これらの議論に増補された部分のほとんど全部をあてたのである。

グルネはチャイルドに倣って，利子引下げを「原理中の原理」としたが，人為的引下げの危険を考慮して，引下げは無理なく「慎重に行なわれる」べきことをくりかえし述べ[12]，もっぱら外国貿易による貨幣の獲得を強調した。フォルボネも基本的にはグルネと同じで，帰着するところも同じであるが，フォルボネはグルネの動きのつかない慎重さを一歩前に進めるように，交易を確保するためにむしろ人為的引下げに踏み切った，かつてのイギリスの英断の例にも言及しつつ，利子引下げの条件整備をより積極的に促進すべきであるという。彼は，「貨幣の豊富と信用の力」によって自然に行なわれる利子の引下げを「快よく，自然な，そして政治体にとって健康に良い発汗作用」と呼び，「状況によっては，もしこの発汗作用を助け，かつひき起させることが必要であれば，それが持つはずの特性を政治体に保つために，予めどんなに考慮を払っても払いすぎることはありえない」(cxxiv)というのである。といっても，それは人為的引下げを示唆するのではないから，結局は「外国貿易の継続的増大のみが貨幣所有者を強いて，賃貸利子のおのずからの低下を生じさせる」(cviii)ということをひたすら強調することになるのである。彼は「大多数の者が自分の労働で富裕になり，さらに富裕になり続けるにつれて，借手の数が減り，貸手の数が増える」と考えるからである。しかし貨幣の増大は物価をつり上げ，交易条件を悪くする不都合を持つ。フォルボネはただ大量の貨幣をよしとするのではない。彼にいわせれば「貨幣の豊富と希少は，近隣諸国との政治的利害を捨象すれば，一国内ではどうでもよい」(cxxxiii)ことであり，「ある政治体の国内の力を本質的に構成するのは流通する貨幣の量ではなく，物産の流通である」(cxxxv)。しかしながら「逆に一国における貨幣のなんであれ，現実の増大が，物産の流通をしだいしだいに活気づける」こともまた事実であるから，フォルボネは，「一国内に存在する大量の貨幣の効果と貨幣量の増大の効果とを区別すべき」(cxxxiii)であり，「国家が繁栄を続けるためには，この増大が継続的であることが必要である」(cxxxvii)と考える。貨幣の継続的増大は「産業活動の変化における連続」をひき起すからであり，逆に「新しい量がもとの量と同じ比率で配分されれば，物産はただちに高くなり，流通はもはや活発ではなくなるだろう」からである。フォルボネはここで，貨幣の増大による物価の高騰という不都合を，貨幣の継続的増大によるインダストリーへの刺激効果，つまり連続的影響と呼ばれるヒュームの議論によって克服しようとするのである。ヒュームはつぎのようにいっている。「貴金属の絶対量は全くどうでもよいことがらである。およそ重要といえる場合はただ2つしかない。

12) *Traités sur le commerce de Josiah Child.* p. 401.

すなわち，貴金属の漸次的増大と，国中に貴金属をくまなく混合し流通させることである」[13]。フォルボネの言説のなかに，ひとはヒュームの影響を見ないだろうか。

フォルボネはこの貨幣論をやがて『商業要論』の「貨幣の循環について」という章でさらに詳しく展開するのだが，彼は『商業要論』の他の諸章でもヒュームの農工分離論や奢侈論を借用し，特に奢侈論では「創意に富むイギリスの著述家」「ヒューム氏」と名をあげて，ヒュームの文章を正確に引用するのである[14]。フォルボネは『ブリティッシュ・マーチャント』の序文を，前述のように，はじめイギリス経済の概観という形式で書き，そのあとで1752年2月に出版されたヒュームの『政治論集』を知り，これに刺激されてヒュームの著作に対抗する自分自身の著作，つまり『商業要論』を，すでに一部執筆し始めていた『百科全書』の諸項目を中心にまとめる構想を持ち，とりあえずヒュームの貨幣論にヒントを得た貨幣の継続的増大論を，外国貿易の役割を相対化し，貿易バランスを否定するヒュームとは反対の立場(外国貿易絶対論)で活用するために，すでに書き上っていた手稿に異質の，かつ大量の加筆を行なった，と考えてよいであろう。ちなみに，『ブリティッシュ・マーチャント』は1753年7月，『商業要論』は1754年3月の出版である。前者の序文の手稿に大増補が行なわれたのは，関連するさまざまな書きものの内容からみても，1752年の後半のおそい時期か1753年の早い時期であろう。グルネのチャイルドへの『注解』は1752年中にはほぼ書き上げられており，フォルボネはこれを手稿で見る機会を持っていたのであるが，グルネの『注解』には貨幣の継続的増大という考えは見出せない。

『ブリティッシュ・マーチャント』の序文の変更にかんして，もう1つのことを指摘しておきたい。それは，やがて『商業要論』でフォルボネの重要な議論の1つとなる「均衡」とか「つり合い」という見方が，貨幣の継続的増大という問題とともにはじめて論じられるということである。フォルボネはすでにウスタリスの翻訳の序文や『スペイン財政論』で農業と製造業と商業の連帯的発展の必要について述べていたが，ここではそれが，「均衡」という考えで語られる。すでにみられた「競争」の原理とともに，彼は「均衡」をもう1つの経済原理として確立しようとしているのである。彼は，貨幣の増大が物産の流通を活気づけるのは，「すべてのことがらは自分を均衡の状態におこうとするから」(cxxxvii)であるといい，だから「貨幣循環の重要な問題点は，国家の各部分がすべての貧しい人々が仕事に就けるほどに十分なつり合いにおいて自己の安楽を感じることである」(cxli)と指摘している。これは，「国中に貴金属をくまなく混合し流通させること」を重要としたヒュームの議論に対応するものであろうか，フォルボネはこのことを「職業間の均衡」という形で，ヒュームがしばしば用いる水や流動体の平衡作用の比喩を用いて，一般的に政治の目標として示すのである。「医者の学問はリキュールを平衡に維持することを目ざす。政治家の有能さは人民のさまざまな職業間に均衡を確立することにある」(cxli)。

大幅に増補された訳注のほとんどは『ブリティッシュ・マーチャント』の対抗誌『マーケイター』(*Mercator*)からの引用にあてられている。フォルボネは『ブリティッシュ・マーチャント』の「無邪気さ」の入り混じった「党派精神」(xxiv)や民衆をそそのかす「最も粗野な寓話」には，その「文体の荒々しさ」(xxiii)とともに，反発していた。一方『マーケイター』に対しては，「事実と権利における」(xxv)認識の甘さに批判的であったが，同誌が終始「攻撃的ではなかった」(xxv)ことと「品の良さを保ったこと」(xxv)を評価し，特に「民衆の迷いを目覚めさせ，条約の利点を詳述することをひきうけた」(xxiii)「ある著述家」(xxiii)(ディフォー)に対しては敬意を表している。フォルボネは『マーケイター』からの豊富な引用によって『ブリティッシュ・マーチャント』の行きすぎや偏狭を正す必要を感じたのである。

フォルボネが当初『ブリティッシュ・マーチャント』の訳稿の末尾につけていた「総括と英仏の商業にかんする若干の考察」では，これらの問題にかんする彼の率直な感想とともに，この時点での彼のおよその経済戦略のようなものが語られていて興味深い。彼は『ブリティッシュ・マーチャント』の主張から7つの問題点をとり出し，そのいちいちにコメントをつけた上で，2つの考察を行ない，1つの結論をひき出している。議論はとうぜんさまざまな問題にかかわっているが，総じていえば，彼は『ブリティッシュ・マーチャント』のフランスに対する保護貿易の主張をことごとく「不当」[15]としながらも，ユトレヒト条約による自由貿易に対しても大いに懐疑的である。圧倒的な優位にたつイギリスの毛織物製造業に対して，自由貿易によって「わが国の毛織物製造業がど

13) Hume, (D). *Political discourses*. Ed. Green and Grose. *Philosophical works*, vol. 3, p. 320(田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』1983年，46ページ)。

14) *Elémens du commerce*, éd. 1754, p. 238.

15) 以下，手稿のこの部分にはページづけがないので引用箇所は示せない。

うなったかを決めることはかなり難しい」し，「わがインド会社はイギリスとの競争のもとでは，いかなる発展も遂げなかっただろう」と思われるからである。また逆にいまはフランスのブドウ酒は安いポルトガルのそれにとって代られてイギリスの市場を失っているが，フランスのものは二・三級品でも優にポルトガルのものに対抗しうるのであり，イギリスの富が進むにつれてフランスの一級品の消費もふえるはずであり，それに今日フランスはイギリスから砂糖を輸入しておらず，むしろイギリスに木綿とインディゴを売っており，また絹織物にかんしてはまだイギリス市場で優位を確保できるのであるから，とくに「そのために条約を持つ必要はない」のであり，「自然的な有利の差」を無視して条約上の「平等」に従うことは「自然的な有利を制限する」ことであって，「両国民は自分たちが一片の通商条約で結び合わされているのを見たいと願うには，あまりに啓蒙されすぎている」と彼はみるのである。それよりも彼にとっては植民地体制と海運を強化することの方がいっそう重要な関心事であった。

『ブリティッシュ・マーチャント』が問題とする点は基本的には2つであっただろう。1つはフランスの低賃金のために，「交易の自由がグレート・ブリテンに創設されたばかりの製紙業と亜麻・絹織物製造業の新生の発展をとめた」ということであり，もう1つはイギリスが要求するレヴァントと東インドの商品のフランスへの持ちこみの自由化をフランスが認めないということであった。これらの問題に対して，フォルボネはイギリスと競争状態にあるフランスの製品は確かに低賃金のために有利であり，とくに絹織物は質の点でもイギリスにおいて優位に立っているが，急速に広まっている捺染亜麻布の消費傾向からすれば，やがて絹の消費は減るだろうし，イギリスの植民地は現に亜麻を本国に供給し始めているのであるから，「彼らが亜麻布の製造において急速な進歩を遂げるのではないかということが心配である」といい，また東インドやレヴァントの商品の自由化の問題にしても，その「販売は(英仏の)どちらの国の場合も日々減少していることは確か」であるから，むしろ今後の問題は東インドやレヴァント交易ではなく，「土地の生産物と漁業と植民地のみが主要な商業国の産業活動と海運とバランスを彼らの豊かさと彼らの発展に応じて保持することになろう」と指摘している。しかしその重視すべき植民地がイギリスの場合のように，「漁業においてはすでに本国のライヴァルとなり，ポルトガルとスペインでは自分たちの穀物を本国と競争して売り，また家内労働という名目で帽子や毛織物を製造している」[16]現状では，「イギリスにおける革命の見本はそう遠くはない」であろうし，植民地の製造業での黒人の使用や植民地間の交易をいくら厳禁としても，それは「弊害を糊塗する」だけのことで，「勤労はいつでもチャンスが来れば，柵をのり越える」ものであると彼はいう。そこで彼はフランスの植民地にかんしては，「独立の利益あるいは関心を知らず知らずのうちに減らすことが植民地をいっそう現実的な従属に保持する」ことになるという観点から，「植民地の創設を援助するために作られたわが国の法律が，植民地の繁栄している今日では植民地をあまりに独立に導きすぎていないかどうかを検討する」ことを政府の課題とするのである。この問題意識は『百科全書』の「植民地」の項でもみられるから，この2つはほぼ同じ時期に執筆されたと考えられるが，そのあとの『商業要論』ではもうみられない。植民地の従属がもっと端的に規定されるからであろう。植民地論はフォルボネの経済論の重要な一角をなし，かつ最も保守的な部分である。それはジョシュア・ジーの議論に最も近いであろう。

植民地体制の強化とともにフォルボネが目ざすものは自由な海運の確立である。彼は結論として，ポナン(大西洋沿岸)の諸港の解放を念頭において海運の自由を唱えるグルネに従って，マルセイユによるレヴァント交易の独占をなくし，ポナンの諸港によるレヴァント交易を自由にして，「北部地方のわが国の製品(毛織物)がイギリスのそれと同じ安さで輸出される」ことと，帰港地選択の自由が保証されて，レヴァントの「絹が(独占的に関税を徴収するリヨン経由ではなく)ポナン諸港経由で入ってくる」ことを期待している。しかし彼は自分自身の展望に悲観的である。船舶が足りないのである。「マルセイユがレヴァント交易を排他的に行なうのをやめるか，それともポナンがアメリカ交易をあきらめるかしない限り，この海運が確立されることは期待できない。フランスの海運がどちらにも不足していることは確かなのである」。前にも述べたように，手稿の末尾につけられた，この「総括と考察」は手稿のイギリス経済の「総論」が大増補されたのとは逆に，出版に際して全文が削除された。序文がより原理的な性格を持つようになったのに比べて，「総括と考察」は結びとしてはやや特殊な問題にすぎ，しかも素描の域を出ないという判断があったためか，あるいはまた『商業要論』の構想がすでにあったためであろう。ポナン諸港の海運の自由は，『商業

16) *Le Négotiant anglois*. Discours préliminaire du traducteur. p. lxxxiv.

要論』において，より一般的にインダストリーとしての海運として再び論じられることになるのである。

フォルボネは以上の『ブリティッシュ・マーチャント』の翻訳と前後して『百科全書』へ寄稿していた。彼が寄稿した項目はアルファベット順でつぎのものである。1) chambre des assurances, 2) change, 3) charte-partie, 4) colonie, 5) commerce, 6) communauté, 7) compagnie de commerce, 8) concurrence, 9) contrebande, 10) crédit, 11) culture des terres, 12) espèces. 1)～8)が第3巻，9)～11)が第4巻，12)が第6巻である。このうち，つぎのものが『商業要論』全12章の半分の6章を構成する。commerce は chap. I. Du commerce en général; concurrence は chap. II. De la concurrence; culture des terres は chap. III. De l'agriculture; colonie は chap. VI. Des colonies; chambre des assurances は chap. VII. Des assurances; change は chap. VIII. Du change; crédit は chap. X. Du crédit にあてられている。その他の項目，すなわちcharte-partie, communauté, compagnie de commerce, contrebande は『商業要論』には収録されず，『商業要論』の他の6章，すなわち chap. IV. Des manufactures ou du travail industrieux, chap. V. De la navigation, chap. IX. De la circulation de l'argent, chap. XI. Du luxe, chap. XII. De la balance du commerce は新たに書きおろされたものである。なお『百科全書』の colonie は大いに書き改められて『商業要論』の Des colonies となり，逆に『商業要論』のために書きおろされた chap. IX. De la circulation de l'argent はその後『百科全書』第6巻の espèces の項に収録された。ただしこの項の冒頭に若干の書き足しがあるが，この項にだけは末尾にフォルボネの執筆であることを意味する彼の名前のイニシャル M. V. D. F.の署名はない。『百科全書』第3巻は1753年11月，第4巻は1754年8月の出版で，『商業要論』は1754年3月の出版であるから，『商業要論』が出版された時点ですでに発表されていたものは第3巻の諸項目だけであり，第4巻は『商業要論』よりあとに出版されることになるが，この巻の項目が執筆されたのは『商業要論』の書きおろしの諸章より早く，おそらく『ブリティッシュ・マーチャント』の序文の手稿が増補改訂されたのとほぼ同じ時期かその少し前であろう。『商業要論』は短い期間のなかの3つの異なる時期に書かれた部分からなっているのである。この構成については，次回の『商業要論』の分析のところでもう一度検討される機会があるが，ここでは『商業要論』に収録されなかった諸項目について，その問題点だけを簡単に述べておこう。

まず，charte-partie というのは傭船契約のことである。この項ではもっぱら実務上のことだけが説明されている。フォルボネのナント時代の知識であろう。第3巻の communauté (同業組合) と compagnie de commerce (交易会社) と，第4巻の contrebande (密輸) との間には執筆された時期のちがいを反映して，それぞれ説明の原理に微妙なちがいがある。前2つの項目はもっぱら「競争」の原理によって，後者の項目は「均衡」あるいは「つり合い」の原理によって説明されているのである。「競争」の原理はフォルボネとしては最も初期からのもので，おそらく「自由と競争」を原理としたグルネに負うものであろう。一方，「均衡」は，すでに述べたように，『ブリティッシュ・マーチャント』の序文の改稿の時点ではじめて姿をみせた原理である。

フォルボネは「同業組合」の項で「競争」の意義を大いに強調している。「商業の第1の原理は競争である。技術が完成し，物産が豊富になり，国家が輸出用の大きな余剰を持ち，その安価によって優位を得，できるだけ多くの人を仕事に就かせ，かつ扶養するという国家の直接の目標を果すのは競争によってのみである」。しかしフォルボネは同業組合そのものが競争の原理に反するというのではない。彼は，同業組合は「インダストリーに門を閉ざす自分たちの規約の破棄」を自らすすんで求めるべきであるが，技術や発明に対する褒賞の規約は大いに残すべきであるという。同業組合は，むしろそれによって競争を刺激すべきだというのが彼の言わんとするところである。「取締りが必要である以上，同業組合が存在したことが弊害なのではない。同業組合が自ら従事する技術そのものの進歩に無関心であることが弊害なのである」。これは，同業組合そのものの解散を求めるグルネ[17]とは大いに異なっている。「自由と競争」という原理を共にしながら，フォルボネは生産力の保持にかんしては，グルネよりいっそう現実的である。またフォルボネは同業組合のもう1つの役割も指摘している。競争の原理のもとでは，「小さな財産が巨大な資本を形成するために(同業組合に)結集し，それによって社会の諸利益がいっそうよく混ざり，これらの細分された財産の信用の方が2，3人に集中していた信用より大きいのである」。同業組合を資本と信用の巨大な集中組織とみる見方もまた，より現実的であり，いっそうユニークである。フ

17) Sécrestat-Escande (G.) Mémoire de M. de Gournay adressé à la Chambre de commerce de Lyon. *Les idées économiques de Vincent de Gournay*. Bordeaux, 1911, pp. 138–156.

ォルボネのこの基本姿勢は「交易会社」の項でも同じである。彼は「商業は交易商人の競争によってのみ拡大され改善されうる」のであるから，「参加者が多数で，資本が莫大で，危険な，あるいは重要な計画を持ち」，しかも「いかなる公的な優遇もうけない」交易会社こそは，「常にねたまれ，しばしば蔑視される」にもかかわらず，「他のすべてのものの唯一の原動力である」として，むしろ大資本，大組織の交易会社を擁護する。彼は特権会社を「野蛮と無知の時代」の所産といい，「今日なお多くの人が競争を制限することを有益と考えている」と批判するのだが，特権が関税の免除に限られるならば，それは「国家が新しいインダストリーを奨励する」という意味合いのものにすぎず，またたとえば国家が「費用や奨励金」を出すとしても，交易商人間の「競争」の結果，「国家の前払いはより確実に，より速やかに国家にもどり」，「企業はより早く完成に導かれ」，「出費はより早い時期に停止する」という理由で，結局は限定された特権会社を容認するのである。グルネはむしろ特権会社批判の方に多くの言説を用い，彼が執着する航海条令の実施に足りない船舶の補充のためにだけ一時的特権ないしは奨励金を認めようとしたこと[18]と，これはまたかなりのちがいである。フォルボネの「自由と競争」の意味内容がいささか独自のものであることがしだいに気づかれるであろう。フォルボネのこの現実的な姿勢は「密輸」の項でも変らない。グルネは密輸に対する唯一最善の策は禁止や国家管理ではなく，「自由と競争」の原理の実践である，生産と流通における完全な自由放任「レッセ・フェール，レッセ・パッセ」であるとし，これを単に密輸防止策としてではなく，国民の全般的富裕の道として認識していた[19]が，フォルボネは，このいささか観念的な響きのスローガンに従うには実務的でありすぎたようである。彼はグルネと同じく禁止政策や国家管理がいずれも不首尾に終ることを指摘するが，有効な防止策としては迂遠な感のある「レッセ・フェール」ではなく，もっと実際的に「ごく簡単な」施策を提言する。それは，「物産の内外の流通を妨げ，したがって臣民の就業，つまりは人口［の増大］を妨げている」国内関税や輸出入関税を「人民の能力につり合った」もの，つまり「人民の商業や富裕と両立しうる」ものにし，したがってそれらが「気づかれないように」徴収され，「恣意的な課税によって常におくらされているインダストリーに非常に有利な」ようにするということである。「この方法こそが臣民間の均衡を確立するのに最もふさわしい」のである。フォルボネはグルネが力説する「レッセ・フェール，レッセ・パッセ」を『商業要論』においても，ついに一度も語ることはない。そこでは，この絶対的普遍的規準に代って，もっぱら，「政治的商業」によって導かれる「競争」と相対的現実的な「つり合い」と「均衡」とが原理として語られるのである。こうして「商業要論」の骨格はしだいに形成されてきた。あと6つの重要な章が書きおろされて，『商業要論』は完成する。

フォルボネの初期の未発表手稿『農業と商業と財政にかんする試論』(Essai sur l'agriculture, le commerce et les finances. 85 pages, 421×284 mm., Bibliothèque municipale de Rouen, Montbret Mss.15) について簡略に検討しておきたい。フォルボネは生前に多数の著作を発表したが，死後に遺された手稿類もまた膨大なものであった。フォルボネは1800年に78才で死去するのであるが，彼は64歳の晩婚であったので，遺される若い夫人のために彼の蔵書と遺稿のすべてを内務省に売却し，夫人はそれによって終身年金を受けるという計画を持っていたらしく，フォルボネの死後，未亡人が蔵書と手稿の目録を作成して内務大臣に提出したものが残されている[20]。それによれば，遺された手稿は全部で311篇である[21]。この交渉は成功しなかった。そして蔵書と手稿はいつの間にか散逸してしまった。私はこの失われた手稿類をもう一度見出すために何度か調査したが，現在までに再び見出せたものは僅か数篇にすぎない。前に述べた『ブリティッシュ・マーチャント』の手稿につけられていた「『ブリティッシュ・マーチャント』の総括と英仏の商業にかんする若干の考察」は未亡人の作製した目録中にもみられるものであるが，『ブリティッシュ・マーチャント』の手

18) *Traités sur le commerce de Josiah Child.* p. 185.

19) Réflexions sur la contrebande. A Grenoble, septembre 1753. Man. 83. Bibliothèque municipale de Saint-Brieuc. cf. *Matériaux inédits de Vincent de Gournay (III)*, éd. par T. Tsuda. Discussion Paper Series No. 51 (Documentation) Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, december 1981, pp. 11–16.

20) Catalogue des livres composant la bibliothèque de Monsieur de Forbonnais. Bibliothèque de l'Arsenal. 6496. ff. 112–135 vo.

21) De l'Isle de Sales もこの手稿類の目録を作った。それは20)の手稿資料中にいっしょに収められているが，Fleury (G.) の François Véron de Forbonnais 注1)，の Appendice にも印刷されたものがある。それによれば，すこし整理されて250篇となっている。

稿そのものは目録にはみられないものであるから，これはフォルボネの死亡時にすでに書斎になかったものであろう。この種のものを含めれば，フォルボネの失われた手稿類はさらに大量のものになると思われる。

ところで，ここで検討しようとするルアンの匿名の手稿も目録にはないものである[22]。しかしこれはまちがいなくフォルボネの自筆で書かれており，1752年1月27日づけのフォルボネあての手紙も手稿の間に挿み忘れられている。手稿には日付けがないが，文中のある記述の日付け(1751年10月)や内容からみて，この手稿は1752年の前半の早い方のものであろう。今日見ることのできるフォルボネの最も早い時期の経済学論文である。

巻頭に自筆で「これは，ある大著のプランとみなされうるだけのものである。完成のためには種々の問題点にかんする非常に正確な情報，なかんずく大きな実務の経験が必要であろう」という断りがつけられており，途中に4ページの欠落があり，巻末の2ページはかなり破損している。内容は18の項に分けられている。Art. I.–VIII. には題名がないが，I.–VII. は Des principes, VIII. は De l'agriculture と題されるべきであっただろう。以下，IX. Du commerce; X. De la circulation et de l'exportation des denrées en nature; XI. De l'exportation des denrées en œuvre ou des manufactures; XII. De la circulation intérieure et de l'exportation par terre; XIII. De la circulation et de l'exportation par mer ou du commerce maritime; XIV. Du commerce direct de l'Amérique; XV. Du commerce d'Afrique; XVI. Du commerce de l'Europe; XVII. Des ports francs; XVIII. De la finance となっている。

フォルボネ自身が断っているように，この手稿は素描あるいは習作と呼ぶにふさわしいものである。理論的構成に欠けていて，グルネの影響と思われるものもまだ多くはない。明らかにウスタリスや『ブリティッシュ・マーチャント』の翻訳や研究以前のものであろう。しかしそれだけにフォルボネの最も初期の思想の状況がうかがえて興味深いのである。

(I) 全体に農業を重視する傾向が強く，その後にも続くフォルボネの特徴の1つがすでにうかがえる。「農業はそのすべての部分において商業の基礎」であり，「その繁栄において不可分な農業と商業は国家の人口，つまり個人の就業と安楽に寄与するがゆえに，立法者はそれらに対して直接的保護の責任を負うている」のである。これは財政的保護を意味しているのである。したがって「財政は他の二者(農業と商業)と不可分な，しかし従属的な第3の問題対象」である。これはウスタリスの訳書の序文や『スペイン財政論』でみられた主張である。おそらくムロンに負うものであろう。しかしここではまだ農業と製造業と商業の連帯的発展という考えはみられない。というより，農業と製造業はやがて現われる重農学派のように，むしろ対立的に理解されている。たとえば農村人口の減少を，彼は「安い費用で作られる製品のために大都市で雇用される大量の無用の腕」のためとしている。彼はまた英仏の農業を比較し，フランスの農業の場合，「奢侈の弊害のために，土地の完全な耕作が必要とする前払いをできる者はごく少数に限られ」ており，農民もまた極度に貧しいという「2つの理由で，われわれはイギリスにまだ劣っている」という。彼は農村に富をとりもどすために，土地そのものに対する課税を提言する。税から解放された小作人は「自分の勤労の利潤が完全に手もとに残ることを保証され」て，土地の「世話や注意を倍増させるだろう」というのである。これらはすでにほとんどケネーの初期の論稿を思わせるものである。

(II) この手稿には製造業にかんする独立した項がない。製造業は「加工農産物またはマニュファクチュア製品の輸出」の項で語られるにすぎない。彼はここでは同業組合そのものにはふれていないが，『百科全書』の「同業組合」の項でみたように，同業組合による技術の褒賞制度や国家による産業活動の「指導」の必要を認め，産業「規則」の改廃にかんしては「極度に慎重で」ある。彼はまた賃金の高騰を防ぐために，「製造業を町や村に追いやる」ことを奨励している。しかしこれは，いわゆる農村マニュファクチュアを，その自由な製造というメリットによって推奨しているということではない。フォルボネは農村マニュファクチュアが拡がっていく場景を自分で見ながら，『百科全書』の「マニュファクチュール」の執筆者が理解した，その真の意味を理解していないのである。内外商業にかんしては，輸送費の軽減，手

22) いくつかの書誌(Desportes(N.) *Bibliographie du Maine*…, Quérard. *La France littéraire*)や伝記(Hauréau, B. *Histoire littéraire du Maine*)は，この手稿の題名によく似た著作をあげている。*Essai sur la partie politique du commerce de terre et de mer, de l'agriculture et des finances*. 1751, in-12; 1752, in-16. しかしこの著作はだれも見たものがいないままに語られたために，この著作は後に *Considérations sur les finances d'Espagne* の第2版で初めて付論として発表された *Réflexions* (注8参照)と同じであるとか，いやそうではないとか，どちらにしても推測の議論だけが行なわれた。

続きの簡略化，河川通行税の免除，船舶の不足等が語られるだけである。ただ目につくのは，さきに『ブリティッシュ・マーチャント』の手稿の巻末の「総括」でみたボナン諸港の有利な海運が，イギリスとの対抗を意識して，すでにくりかえし語られていることである。

(Ⅲ) しかしこの手稿のなかで最も大きな特徴と思えるのは，「競争」の原理と「ワークハウス」(la maison de travail) の構想がくりかえし語られていることである。彼は「競争」こそは「商業の最も積極的で，かつ最も広範な原理」であるといい，これが「利潤が法外なものとなるのを妨げ」，それによって「独占が破壊される」ことになるという。これはこの手稿中で最も明快な原理であり，これ以後の著作でも重視され，『商業要論』において最も重要な原理とされるのである。「ワークハウス」の構想は，はじめ農村から都市へ流出した貧民の救済のための「一策」として語られるが，やがてそれにとどまらず，「老衰者以外の老人」，「身障者」にまで「雇用の機会」を拡げて，ロープの製造，亜麻布・絹織物の簡単な下作業，果ては開墾地への労働力供給におよぶ大構想となる。彼はこれを「あらゆる状況において有益であり，ことに現下の状況においては絶対に必要な」ものであるとする。

この手稿で積極的な意味を持つ議論は(Ⅰ)と(Ⅲ)であり，(Ⅰ)は，すでに指摘したように，ムロンの著作に学んだものであり，(Ⅲ)の「競争」はおそらくグルネに負うものであろう。そして(Ⅲ)の「ワークハウス」は当時出版されていたジョシュア・ジーの著作のフランス訳からの影響であろう[23]。農業と商業の重視，そして競争と労働の強制，これがフォルボネの最も初期にみられる「折衷」の状況である。

津田内匠
(一橋大学経済研究所)

23) Gee (J.) *Considérations sur le commerce et la navigation de la Grande-Brétagne. Ouvrage traduit de l'Anglois, de M. Joshua-Gee, sur la quatrième édition.* A Londres, chez A. Bettesworth…, 1749, xxiv, [iv], 268 p. chap. XXIII. Comment on pourroit mieux regler et mieux employer les pauvres. グルネもジーに学んだところがある。cf. Mémoire sur le rétablissement de la population du tabac. Man. 83. Bibliothèque municipale de Saint-Brieuc. グルネはジーの著作のフランス訳から一章(chap. XV. Commerce de l'Angleterre avec les pais dépendans de l'Angleterre qui produisent le tabac)を引用している。グルネ自身がジーの著作の訳者ともいわれている。cf. *Matériaux inédits de Vincent de Gournay (IV)*, éd. par T. Tsuda, Discussion Paper Series No. 45 (Documentation), Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, march 1981, pp. 13–14.